

目次

第15講	歌物語	44	第16講	歴史物語	47
第14講	作り物語(2) (源氏物語)	41	第17講	軍記物語	50
第13講	作り物語(1)	38	第18講	日記(1)	53
第12講	説話(2) (仏教説話)	35	第19講	日記(2)	57
第11講	説話(1) (世俗説話)	32	第20講	随筆	60
第10講	古文常識	29	第21講	評論	63
第9講	和歌(2)	26	第22講	近世(1)	66
第8講	和歌(1)	23	第23講	近世(2)	69
第7講	敬語(2)	20	第24講	総合演習(1)	72
第6講	敬語(1)	17	第25講	総合演習(2)	75
第5講	語法(3) (助動詞・助詞)	14	第26講	物語的文章の読解(1)	79
第4講	語法(2) (助動詞・助詞)	11	第27講	物語的文章の読解(2)	81
第3講	語法(1) (助動詞・助詞)	8	第28講	論說的文章の読解	83
第2講	用言の活用	5	文語文法要覧		86
第1講	重要古語の確認	2			

第1講 重要古語の確認

1 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

世の中になほいと心憂きものは、人にくまれむことこそある [A]。誰てふ物狂か、われ人にさ思はれむとは思はむ。されど、自然に宮仕へどころにも、親・同胞の中にも、思はるる思はれぬがあるぞいと [B] や。

よき人の御ことはさらなり、下衆などのほども、親などのかなしうする子は、目たて耳たてられて、いたはしうこそおほゆれ。見るかひあるはことわり、いかが思はざらむとおほゆ。ことなることなきはまた、これをかなしと思ふらむは親なればぞかしとあはれなり。

親にも、君にも、すべてうち語らふ人にも、人に思はれむばかりめでたきことはあらじ。

〔枕草子〕 5

問一 波線部 a～c の読みを、平仮名、現代仮名遣いで記せ。

a [] b [] c []

問二 傍線部③～⑤の現代語訳として最も適切なものを、それぞれ次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

③ ア 決して口にしなない イ 言うまでもない ウ さらにつけ加えたい エ 世間によくあることだ

④ ア かわいがる イ 気の毒に思う ウ かなしませる エ つらく当たる

⑤ ア いたいたしく イ うとましく ウ 大事にしたく エ 親しみ深く

問三 傍線部①「さ思はれむ」の「さ」に該当する語を、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 心憂く イ にくく ウ 物狂と エ 自然に

[] []

問四 傍線部②「よき人」、傍線部⑥「見るかひある」と対になって使われている語句を、それぞれ文中から抜き出せ。

問五 傍線部⑦「これをかなしと思ふらむは親なればぞかし」を、「これ」の内容がはっきりわかるように現代語訳せよ。

〔 〕 ② 〔 〕 ⑥ 〔 〕

問六 空欄Aには助動詞「べし」、空欄Bには形容詞「わびし」が入る。それぞれ適切な活用形に直して答えよ。

〔 A 〕 〔 B 〕 〔 〕

問七 傍線部⑧「ばかり」と意味の異なる「ばかり」が使われているのはどの文か。次のア～エの中から一つを選び、記号で答えよ。

- ア 卯の時ばかりに舟出だす。 イ あまり涼しきままですみわたりて、げに身にしむばかりなり。
ウ 月影ばかりぞ八重葎にもさはらずさし入りたる。 エ 人の亡きあとばかり悲しきものはなし。

② 次の文章は、後鳥羽上皇のもとで夜を徹して催された連歌和歌会において、源具親が早退したことに端を発するエピソードを、源家長が書き留めたものである。これを読んで、後の問に答えよ。

八月十五夜ことわりも過ぎてくまなく侍りしに、よもすがら連歌和歌会侍りき。その夜いささか例ならぬ事いできて、具親とくいでられ侍り。御尋ねたびたび侍りしに、そのよし申すともかひなきことやおほしめしけむ、いでぬる事くちをしきこととおほしめす御気色なり。長き夜も程なき心地して明けぬれば、おのおのまかりいづ。十六日のまだ疾う、召しによりて台盤所に参りたれば、おほせられし御事やさしく侍りき。「夜べの月にしも具親早出したることくちをしき思ひ静めがたし。早く和歌所に召し込むべし」とおほせ有り。恐ろしきものから優しく受け給へて、やがて召しに遣はす。御使ひにも先立ちて参りたれば、此のよし申し含めて召し込む。布衣なよらかにて、そこはかとなくながめぬたる気色、いとほしくをかし。秋の日もくらしかねたるに、⁵ 月もはなやかにさしいでて、よべの光なほくまなきをつづく一人ながめて、

くまもなく名におふ秋の空よりも思ひいである夜半の月かな

返事

さぞなげに思ひわぶらむ今宵しもかごとがましく月ぞさやけき^④

十七日のあしたにこのよしを奏し侍りしかば許されにき。召し込められしほどはおそろしく心まどひせしを、つくづくと思ひとけば、世人の聞かむもこれ^⑤はさまであしかるまじき事と思はれたりしことわりなり。

〔源家長日記〕

〔注〕 ○具親：源具親。鎌倉期の歌人。

○和歌所：勅撰集編纂所。文中の和歌所は後鳥羽上皇が新古今和歌集編纂のため設置したものである。

○召し込む：召し出して押し込める。

○御使ひにも先立ちて：御使ひの者よりも先に立って。

○布衣：綿布でこしらえた質素な着物。

○さぞな：そのようにまあ。「な」は詠嘆の助詞。

○げに：ほんとうに。

問一 傍線部①・③・④それぞれの意味を記せ。

①

③

④

問二 傍線部②の「御尋ね」は誰が、誰に、誰のことを尋ねたのか。

問三 「さぞなげに……」の歌は、誰が誰に宛てて詠んだものか。

問四 作者が、傍線部⑤で「さまであしかるまじき事」と判断した理由を述べよ。